

この本は、著者の二十五年以上にもわたる、この問題への関心と研究がもたらしたものである。

著者がこの本をあらわすにあたって想定した読者は、ひとりっ子の親であった。ひとりっ子が、どういうものであるかをあきらかにし、ひとりっ子はどのように教育しなければならぬかを、ひとりっ子の親にあかぬ希望をあたえようとして、この本は、書かれたものである。

山下俊郎著

ひとりっ子の心理と教育

松村康平

書評

著者が想定した読者は、しかし、ひとりっ子でない子どもの親たちでもあった。ひとりっ子の教育と一般の子どもの教育とは、まったく同一の地盤の上に立つものだとする著者の立場が、矛盾なくそのことを可能にしているのである。

本書が、ひとりっ子でない子どもの親たちに役立つものであれば、多くの子どもたちを教育する教師・保母にも、役立つものとなるであろう。著者の想定した読者は、教師・保母でもあった。

本書が、教育の実際上の問題と取りくむ親や教師・保母のいづれにも役立つためには、その根底に、一般通用性のある基礎的研究が用意されていなければならない。著者は、それに十分に価する心理学的研究を用意している、これが、本書を、研究者にもすぐれた指針を与え得るものとなしている。

著者の想定した読者は、このように広範囲なものであって、しかもよくその目的を達し得たと思われる本書の特色は、どのようにして導き出されたものであろうか。

その基本的な動因とみられるものは、著者における一般性の認識である。ひとりっ子というきわめて特殊なものにも、一般に通用する法則的事実を発見しようとする著者の態度である。実は特殊なものへのその見通しが得られなければ、著者にとっての問題とはなり得ないとするいえる問題把握の仕方が、主な動因の一つであろう。しかし、この動因に導かれる思索の結果は、一般性をたかめることによって抽象性をまし、しばしば読者層を限定していく。本書が、広範囲の読者をとらえ得ると思われる動因は、また別に求めねばな

らない。それは、子どもの教育者たちの具体的な要求を体験的に把握して、それにこたえる著者の誠実さにあるだろう。平明な文章は、思索の伝達を容易にするための意図からであるよりも、読者に語りかける親密な態度から、うまれたものと思われる。

本書は、序章、ひとりっ子の心理、ひとりっ子の教育、結語からなっている。ひとりっ子の教育原理は、「経験の尊重とその統制」および「子どもどうしの社会生活の尊重」の二つにしばられる。そして、これはそのまま一般の子どもの教育原理であるとされている。

本書は、複雑な人間関係をとらえるのにすぐれた一つの方法を、具体的に示したのもともいえよう。本書の立場からは、これ以上は困難かと思われるほどに論議がつくされているが、この立場が、人間関係をとらえる「一つの立場」であることに思いいたれば、新しい事実の発見と教育技術が、うまれるかもしれない。たとえば、ひとりっ子は、「父・母・子」関係における一員であり、ひとりっ子でもまた、父・母がそうであるように、その家族関係を発展させる主導的な役割の果たせるものとして把握する立場からは、本書とは異なる領域の開拓が、可能になるのではないかと思われる。

(牧書店発行 定価二百八十円)

B6(二百七十ページ)